

私たちはどのように作品を解釈しているのか？

担当：石井 拓洋

takuyo.ishii (a) gmail.com

問1 この詩をどのように解釈しますか？ どのような世界が見えてきますか？

古
寺
に
お
の
斧
こ
だ
ま
す
る
寒
さ
か
な

問2 「12」の次にあらわれる数字はなに？ その理由は？

2 → 4 → 6 → 8 → 10 → 12 → ?

問3 正しいのはどれ？ その理由は？

$$68 + 57 = 125$$

$$68 + 57 = 5$$

私たちはどのように作品を解釈しているのか? (〈受容理論〉をめぐる 問い)

担当: 石井 拓洋

takuyo.ishii (a) gmail.com

作品の意味は「読者」側によって作られているのではないか?

「読者」はその時、「作者」像すら作り上げて解釈しているのではないか?

問1 この詩をどのように解釈しますか? どのような世界が見えてきますか?

寒さかな
斧おのこだまする
古寺に

この詩の作者はコンピュータ。つまり、プログラムが、たまたま生成した文字列。このような背景を知る前後で、多少でも、詩の解釈や印象が変化するのはなぜだろうか? その変化が示唆するのは、「読者」は、「テキスト」(作品)解釈の時、自らのうちに、ある「作者」像を想定することで、解釈の正当性を得ている、ということではないだろうか?

参考: 黒崎政男『哲学者はアンドロイドの夢を見たか』p.121.

問2 「12」の次にあらわれる数字はなに? その理由は?

2 → 4 → 6 → 8 → 10 → 12 → ?

いかなる数字も考えられる。ここで「14」と回答する人は、自らのうちに、「2ずつ加算する」という意図をもった、〈統一性を指向する作者〉の存在を無意に想定している。一方、もし、かかる作者を想定しなければ、つまり、純粋に「テキスト」のみで解釈するならば、どのような数字でも考えられることになる。したがって、「テキスト」(作品)解釈は「読者」のうちに、統一性を志向する「作者」の存在を想定しなければ解釈できないとも考えられる。

参考: 竹田青嗣『言語的思考へ: 脱構築と現象学』p.246.

問3 正しいのはどれ? その理由は?

$$68 + 57 = 125$$

$$68 + 57 = 5$$

いずれも正しいと考えることも可能。理由は問2と同じ。上のみを正解とするのは、「+」(プラス)という概念を正確に使用せねば、気がすまないような、架空の「作者」の存在を「読者」が無意に想定するから。一方、たとえば、「+」の記号を「クワス」と読む異星人がいたとして、彼らにとってこの記号は「ある数に加算する数が57を超えると、答えはつねに5である」という概念であったならば、その場合は、下の式もまた、正しいことになる。すくなくとも、この問いだけでは、つまり、「テキストのみ」(作品のみ)からでは、「クワス」の可能性を否定できない。いずれにしても、「テキスト」(作品)解釈には、「読者」は「作者」を無意に想定している。(「クワス」とはクリプキが勝手に作った想像上の記号)。

参考: ソール・クリプキ『ワイトゲンシュタインシュタインのパラドックス: 規則・私的言語・他人の心』11~14頁。

おの
古寺に斧こだまする寒さかな

わが恋は空のはてなる白百合か

「作品というものは、読まれることによって初めて成立する。作品とは、あたかも「実体」のように存在しているのではなく、認識する者との関係が不可欠である。読むという行為において、読み手はこれらの句の背後に（意識するしないにかかわらず）虚焦点としての作者を想定しており、そこから読み取ってくるものは実は読み手の心情や思想にはかならないのだ。実作者の存在する俳句においても実は同じことが起っている。その意味で、作者は読み手なのだ」

※ 上記の俳句は、実はコンピュータが作成したもの。つまり、作者はコンピュータである。人間ではない。ならば PC という真の作者を知る前に、各自が俳句から読み取った内容は、一体、どこからきたものか。また、最初にコンピュータが作ったと知らされていたならば、もとより、先ほどのように、内容を真剣に読み取らんとする意欲は沸いたであろうか。

黒崎政男『哲学者はアンドロイドの夢を見たか』東京：哲学書房、1987年、123頁。
（参考）大橋洋一『新文学入門』東京：岩波書店、1995年、90頁。

テキスト text

- ・「従来は教科書とか、文学作品等の本文という意味で使われるのが普通であったが、1960年代から、ことにフランスの構造主義以降の思想の影響を受けて、作品 (work) とは別の意味で使われるようになった用語。現在では文字で書かれたものの他に、絵画や映画、写真、図像についても使われる」（富山太佳夫「テキスト」『岩波哲学思想事典』1117頁）。
- ・「テキストは、作者との関係から独立した意味を常に生産する。テキストは読者と相互作用を起こし、読者によって生産され、悦楽、、、の源である。これに対して、『作品 (work)』は、、、作者から独立していない」（ジョゼフ・チルダーズら「テキスト」『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』東京：松柏社、399頁）。

受容理論（受容美学，読者反応批評） reception theory

- ・「批評理論は、20世紀のある時期に、作者からテキストを経て読者へと関心の中心を移していったといわれる（※ 1970年代ごろ）。しかしそれはすでに30年以上も前のことである。それ以後さまざまな理論が登場し、今日、批評理論の関心は、テキストと読者をつつむ 政治的歴史的コンテクストに移っている」（丹治愛編著『批評理論』講社選書メチエ、2003年、32頁）。
- ・受容理論の主要論者 ヴォルフガング・イーザーは、それまでの「作者の意図」に合うことに正統性を求める読み方を批判し、「『テキスト』と読者の相互作用によって読書行為が行なわれる」とした。「読者は、読書行為の中で、自分と『テキスト』との『空所』を自らの内面世界から補充し、意味の結合によって繋げたりして、自分の一貫した解釈を構成しようとする」。しかし、時に読者はその解釈の一貫性が破綻していることを知り、テキストからかかる解釈を「否定」される。かくして、ますます読者は、解釈に熱中し、「テキスト」を読み返し、思考を繰り返し、やがて決定的な解釈と出会う。（鎌田首治朗「イーザーの読者論再考」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第62号、2013年、152頁）。

「含意された作者」（想定された作者） implied author

- ・「作品から想定されるのは、、、作品を説明できるような統一的な意図を持った仮説上の作者です、、、 想定された作者というのは、実作者の歴史的存在を捨象した」存在であり、結局、「わたしたち読者が作っていることとなります」（大橋『新文学入門』89 - 91頁）。
- ・「含意された作者」の概念は、もともとウェイン・ブースが提唱したもの。この概念から、後にイーザーは「含意された読者」を論じた。